

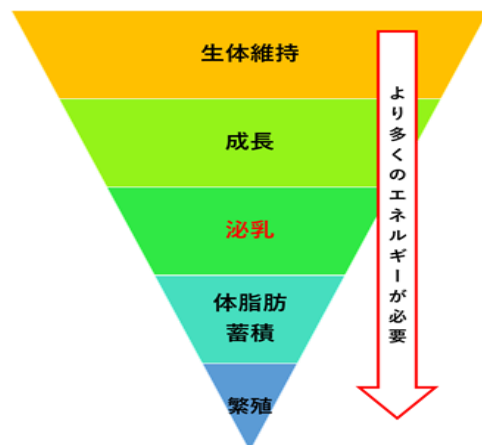
あしよろ・ハードサポート通信

雪解けが進み、本格的な春を前に日々暖かくなってきていますね。日照時間も長くなり乳牛にとっての最適な気候までもう少しでしょう。今回は繁殖の中でも改善が難しいといわれる受胎率、こちらに焦点を当ててみたいと思います。

◆繁殖に必要な栄養供給

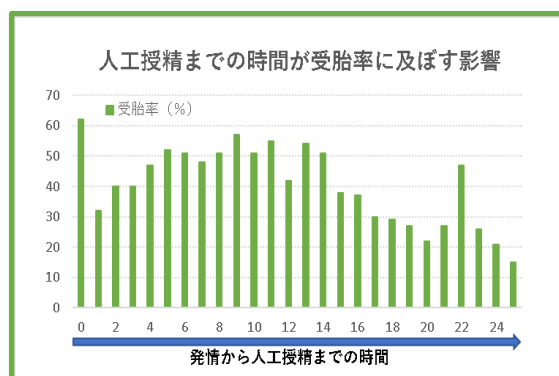
分娩直後の乳牛は生理的に泌乳量が上がり、それに見合う分の栄養摂取量が追いつかず負のエネルギーバランスになりやすいです。乳牛では右の図のように繁殖に回るエネルギーの優先順位は体脂肪蓄積の次となっており、体が痩せている最中に受胎することは難しいこととなります。特に初回授精時においては高い泌乳量に応じた栄養供給量が必要であり、粗飼料品質の変動がある際など定期的に飼料給与内容の見直しをすることも大切です。

〈乳牛のエネルギー利用順序〉



◆授精のタイミング

乳牛は遺伝的な改良により産乳性が向上し、発情兆候を示す時間が昔に比べ短くなっています。発情を発見したとき、それは発情の開始でしょうか？または終わりでしょうか？右のグラフでは発情開始から人工授精までの間隔が受胎率にどう影響するのかを示しています。例えば朝に発情を発見し、それが発情の終盤だった場合は当日の夕方に授精すると、受胎率が低下することが考えられます。最近では、発情発見後はなるべく早めに授精することが推奨されています。



【改訂版】それでも基本は発情を見つけて種を付ける
より引用

◆子宮内膜炎の存在

分娩後の子宮内膜炎は子宮の細菌感染によって引き起こされる疾病であり発症すると子宮の修復が遅れ受胎率が大きく低下します。分娩後、白濁した悪露が長引いている場合は子宮内膜炎に罹患している可能性が高く、早めに獣医さんに診療してもらい子宮内薬注や消炎剤の投与をお勧めします。またリピートブリーダーとなる個体は子宮内膜炎が確認されることも多いので分娩後30～40日にフレッシュチェックを実施することで早めに発見し対処することができます。



◆ホルモン剤の利用

高泌乳牛ほど血流量が多くなり、血管内を流れる繁殖に関わるホルモンの濃度は薄くなりやすいと言われています。このことから牛の状態に合わせて外部からホルモン剤をサプリメントすることは有効となります。繁殖検診後のPGやGnRHなどの投与はもちろん、シダーシンクやダブルオブシンクといった定時授精プログラムも農場の傾向に合わせて利用することで受胎率の向上につながります。

月	火	水	木	金
3/15	16	17	18	19 GnRH午前
22	23	24	25	26 PG午前
29 GnRH午前	30	31	4/1	2
5 GnRH午前	6	7	8	9
12 PG10時	13 PG10時	14 GnRH18時	15 授精10時	16

ダブルオブシンクプログラム
(スケジュール例)

◆受胎率向上による効果

受胎率を上げ、繁殖サイクルの回転を向上させることは年間の出生頭数が増えることに加え、乳生産効率の向上や牛が過肥になる前に乾乳期を迎えられるので周産期疾病リスクの低減など様々なメリットがあります。この機会に自農場の受胎率や問題点を把握し、対策を模索してみたいかがでしょうか。(船久保 雄二)



.....

・私、船久保は今月末でJA あしよろの担当を離れることになりました。足寄町にきて1年9カ月と、短い間でしたが多くの酪農家さんに受け入れていただいたこと、感謝致します。4月からは市川1名の体制になりますので宜しくお願いします。